

ハウジング・ファーストに関するノート②

— 経験的証拠と批判 —

山 北 輝 裕

1. はじめに

本稿はアメリカではじまったホームレス状態の人々を支援するプログラムであるハウジング・ファースト（以下HFと表記。パスウェイズ・トゥー・ハウジングはPHFと表記）をめぐる調査研究の動向をレビューすることを目的としている。本稿に先立つ①稿（山北 2017）では、HFの経緯・理念・支援実践について簡単なレビューを行った。HFは精神障害・薬物依存などの複合的な困難を抱えるいわゆる慢性的なホームレス状態の人々に対して、シェルターなどの中間施設を経ずに、ダイレクトに個室のアパートに入居することを支援するプログラムである。現在、このプログラムは世界中のホームレス施策を席卷している。

つづく②稿では、HFの入居者の維持率に関してエビデンス（経験的証拠）を構築した量的調査と、実際にHFを利用した当事者の声や、HFを提供する支援者とその利用者の相互作用を扱った質的調査をいくつか紹介する。

そして、アメリカ国内におけるHF批判や、国外からのHF批判について検討する。その際、HF対象者の社会統合、包摂をめぐる議論も含めて検討することで、HFの社会学的考察に向けた準備としたい。

2. 量的調査

①稿でもふれたように、HFに関する量的調査は、HFの効果を実証するうえで重要な証拠 (evidence) を提示し続けている (Tsemberis, Moran, Shinn, Asmussen, Shern 2003, Gulcur, Stefancic, Shinn, Tsemberis, & Fischer 2003など多数)。

まず本稿ではサム・ツェンベリスらによって最もインパクトのある論考とされているHFによるアパートでの居住維持率を明らかにした (Tsem-

beris, Gulcur, Nakae 2004) を概観したい。

この調査は225人の当事者をHFと従来の支援策（継続的ケア）にランダムにふりわけ、それぞれの長期的な効果を比較することを目的としている。仮説は（1）HFのグループは継続的ケアのグループよりも「当事者の選択」（Consumer Choice）が大きい。（2）a.HFのグループは継続的ケアのグループよりもホームレス（状態である）率は低い。b.HFのグループは継続的ケアのグループよりも高い居住維持率を達成し維持する。（3）HFのグループは継続的ケアのグループと薬物使用率が同じ、もしくは低い。（4）HFのグループは継続的なケアのグループと比べて薬物依存治療への参加が少ない。（5）HFのグループは継続的ケアのグループと比べて精神的症状率が同じか、低い（＝状態が良い）、の5つである。

1997年から2001年にかけて、従来の支援策126人とHF99人の個々の2年間を比較するにあたって、定期的に5分間の電話をかけたり、6ヶ月ごとにインタビューを行い、6ヶ月88%、12ヶ月84%、18ヶ月84%、24ヶ月78%の当事者をフォローすることができたとされている。

結果として「当事者の選択」は、HFが継続的ケアよりも大きく、そして2年間を通してその値を維持していた。居住の維持率に関しては、HFは継続的ケアよりも早くホームレス状態を脱し、アパート維持率も2年間を通してHFが継続的ケアよりも高かった。アルコールや薬物使用に関しては、両グループ間に有意な差はなかった。薬物依存治療の利用に関しては、継続的ケアのグループがHFよりも使用していた。そしてHFはその利用が減少し、継続的ケアのグループは増加していた。精神的症状に関しては、両グループ間で有意な差はなかった¹⁾。

HFグループが80%の居住維持率だったことから、従来の継続的ケアがもつ「まだ彼らには家に入居する準備ができていない」という仮定に修正をせまることになる。そして「当事者の選択」が居宅の維持に貢献しているとされている。また多くの支援者や政策立案者が心配していた薬物使用に関しても、継続的ケアと比べてHFのグループが急に増加することはなかった（最初に家を提供することで、当事者は家を保つために依存を治療する方向に動機が向けられる）。

薬物治療の利用に関しては、継続的ケアの当事者がHFの当事者よりも多いにもかかわらず、HFの当事者とほぼ同じ薬物使用率であった。このことから、薬物治療の利用率と薬物使用率のズレが生じるが、これは継続

的ケアの当事者が薬物治療施設を単に期限つきの家として利用していることを指しているのではないかとされている (Tsemberis, Gulcur, Nakae 2004: 654-5)。

次にHFによる社会統合に関する量的調査を検討しておきたい。社会統合に関しては4節でもふれることになるが、ここではレイラ・グルカーやツェンベリスらによって行われた調査を紹介したい (Gulcur, Tsemberis, Stefancic, Greenwood 2007)。

この調査では、インリン・ウォンとフィリス・ソロモンによる物理的、社会的、心理学的といった多元的な領域を包含する社会統合の枠組みを採用しつつ、HFと従来のケアに振り分けられた人びとのコミュニティ統合について検討している。この調査は上記の4年のパネル調査期間の、最後の2年間に行われている。

コミュニティ統合の要素に関しては、生活満足度、心理的な幸福状態、日常生活動作能力 (ADL)、社会・余暇活動、社会的支援への満足度に加えて、近隣との結びつき、自己実現、生活の質、組織への参加、近隣における社会的ネットワークの数 (身近に相談できる人の数) を結果変数としている。一方、予想変数はプログラム領域に関する5つの変数から設定されている。居住環境、「当事者の選択」、薬物使用の治療への参加、精神科治療への参加、スティグマ (「このコミュニティの成員は精神障害をかかえた人をみくだしているか?」などの質問) である。

因子分析を経て、回帰分析を行った結果としては、心理的統合に関しては「当事者の選択」が有意であった。身体的統合に関しては薬物依存治療が有意であった。社会統合に関してはColorad Symptom Index (CSI)²⁾ が有意であった。自立・自己実現に関しては、「当事者の選択」がわずかに有意である一方で、CSIが有意であった。

これらの結果から、グルカーらは長期入院から家に移ることが積極的に心理的統合と関連することや、重篤な精神的症状が心理的統合に消極的に影響することを指摘している。また、重篤な障害をかかえる人たちはサポートを必要とするため、コミュニティに統合されていない気分になるかもしれないが、一方で障害の少ない人よりもそこで経験した (スタッフとの) 相互作用に満足しているかもしれないことや、薬物依存の治療が身体統合にはいい影響をもたらすが、社会統合には消極的な影響をもたらすといったように、統合に幾分か矛盾した影響をあたえることを指摘してい

る（ピアグループなどの正式な組織に参加することで他の地域社会や近隣などインフォーマルな社会化を犠牲にしている可能性がある）。

これらの考察から、コミュニティ統合を円滑にするためのインプリケーションとして、（社会統合にとって、標準的な住居は有意であったことから）居住者の社会統合を最大化するような住宅プログラムの必要性を掲げている。さらにそれは利用者が生活に関する選択を発揮できるようにすべきなので、HFモデルは最も適合的であると指摘されている。また薬物治療に関してはそれぞれの統合領域（心、身体、社会）でのバランスがとれるように調整が必要であるとされている。

3. 質的調査

アパート維持率を明らかにする量的調査のほかに、HFによってアパートを得た当事者の思いに注目した質的調査が重ねられている。

本稿ではまず社会福祉を専門とするデボラ・パジェットの一連の研究を紹介しておきたい。彼女は、PHF創始者であるツェンベリスらとHFに関わる調査にたずさわっており、『*Housing First*』（Padgett, Henwood, Tsemberis 2016）を刊行している。

パジェットの質的調査には、アンソニー・ギデンズも使用する「存在論的安心」の概念を援用しながら、いかにして当事者自身の主観的なアイデンティティの変容が起こっているのかを明らかにした（Padgett 2007）のほかに（以下で詳述）、13人の精神障害をかかえる女性でホームレス状態であった人にインタビューを行い、精神障害・薬物依存・トラウマについての個人史を考察した（Padgett, Hawkins, Abrams, Davis 2006）³⁾。

昔ホームレス状態で現在はサポータティブハウスで暮らす人が、自身の薬物依存からの回復をどのように理解しているのか。よくなったと考える当事者の視点から薬物依存の回復について何を学ぶうか。いかにして過去の薬物依存が現在の物語に収まっていくのか。ハームリダクションVS禁欲の政治はいかにして回復の試みに影響するものとして考えられているかを明らかにした（Henwood, Padgett, Smith, Tiderington 2012）⁴⁾。

PHFと従来のプログラムの2つのモデルで行われているスタッフの支援実践が、プログラムの哲学的価値と一貫しているか、あるいは反しているかどうかを明らかにした（Henwood, Stanhope, Padgett 2011）⁵⁾。

NYHS（New York Housing Study）の量的調査とNYSS（New York Services

Study) の質的調査をトライアングレーションしたかたちで、HFと従来のプログラムの差異が支援者のパースペクティブに影響するかどうかを説明した (Henwood, Shinn, Tsemberis, Padgett 2013)⁶⁾ などがある。

パジェット(ら)の調査は、当事者の回復の物語だけでなく、HFの支援者側の考えも分析対象としているが、上記の2つの支援者調査では「インプリメンテーションパラドクス」(implementation paradox) についてふれられている。支援実践の局面においてPHFスタッフは治療に関心があるが(家を最初で得るプログラムだからこそなのだが)、TFのスタッフは家の獲得に関心が向くというねじれが生じるという (Henwood, Stanhope, Padgett 2011 ; Henwood, Shinn, Tsemberis, Padgett 2013)⁷⁾。

本稿では当事者へのインタビューに関して、家に入居した後に当事者のアイデンティティがどのように変容したのかを明らかにした上記の「わが家に勝るものはない」という論考 (Padgett 2007) をやや詳細に紹介したい。

HFを利用した当事者21人と、トリートメント・ファーストを利用した当事者18人の合計39人へのライフヒストリーインタビューを行い、グラウンデッドセオリーの手法で分析が行われている。独立した家を得た当事者が「家」をもつことを、どのように成立させ、描くか。「存在論的安心」の指標にそれらの経験がどの程度影響するのかを明らかにしている。

この調査で援用される「存在論的安心」は、アン・デュピュイとデイビッド・ソーンズの指標 (Dupuis & Thorns 1998) であるが、HFの文脈で以下の4つに変換されている。(1) 物的、社会的環境のなかで自宅 (Home) は恒常的な場である。(2) 自宅は人間の経験の日々のルーティンが形成される場である。(3) 自宅とは、他の場所での生活の特徴を示す監視から自由に感じるため、生活をコントロールしているように感じるような場である。(4) 自宅はアイデンティティが構築される安全な拠点である。

従来のトリートメント・ファーストとHFをこれら4つの指標に基づき比較しても、結果は大きく違ったかたちで現れるとされている。

質的データのトランスクリプトを読む限り、調査者側からは「アパートを得てどんなことがよかったですか?」「なぜあなたにとって自分のアパートをもつことが重要だったのですか?」「アパートを得たことがターニングポイントになっているようですね?」といった質問が掲載されている。

当事者の語りとしては、〈コントロールと自己決定〉に関しては「好きなだけ入れる。自分の場所では他人に『何しろ』って言われない。〔暴力的な彼氏から〕私は場所を手に入れた…もう暴力は受けない」。〈日常のルーティン〉に関しては「朝起きることができる。新しいシャツを着ることができる。綺麗なジーンズ、靴下をはくことができる。…それが回復の一部さ」。〔公園に行ける。鳥を見れる。犬を見れる。普通の人に『こんにちば』と言える〕。〈プライバシーと監視からの自由〉に関しては「すべて監視はいらない。もう50代後半だぜ。…あそこを出れてうれしいよ。自分の家で暮らせてうれしいよ」。〈アイデンティティ構築〉に関しては「パスウェイに会うまでそうではなかったけど、まっすぐ生きてるよ。どうやってやめるか学び、自分をよく見て、自分がどういう人間か認識してるよ」。〈家を得た次は何なのか〉に関しては「仕事かボランティアか何か見つけないといけない。…言い換えれば社会に戻るのさ」などが引用されている (Padgett 2007: 7-11)。

このように自宅のアパートに住んでいる人びとにとって「存在論的安心」は明確なものとなった (Padgett 2007: 11)。パジェットは、家が自宅をつくるわけではないし、また自宅が生活をつくるわけではなく、未来への希望 (仕事を得る。仲間と楽しんだり、他者を助けたり、社会に参加する) が心理的な回復のコア要素であると指摘している (Padgett 2007: 12)。

4. HF への批判

こうしたエビデンスを背景に、ホームレス支援策の歴史の中でもHFは革新的な取り組みとして位置付けられていくが、そのことが各方面から批判を向けられる事態となっている。なお以下様々なHFへの批判を紹介するが、これらの研究に対する本稿の立場についてはひとまずこの②稿においては留保したい⁸⁾。

4.1 HF 導入時の批判

まずアメリカ国内の批判を見ていきたい。ツェンベリスがHFを始め、各地に講演やコンサルタントに奔走していた頃に、彼が投げかけられた批判は大きく3つあったとされている。それらは (1)「それはニューヨークだからうまくいっているんじゃないのか」(2)「我々の市内における住宅市場は空き家率が低い」(3)「これは私たちのクライアントには無

理だ」という批判である。後にも、「これは全ての当事者のものではない」という批判も向けられたという (Padgett, Henwood, Tsemberis 2016: 108)。

とくにツェンベリスが紹介しているのは、1999年時のウエストチェスター郡への導入の状況である (Padgett, Henwood, Tsemberis 2016: 106)。HFの導入とともに従来の施策に対する130万ドルの予算減額が決定されたことをきっかけに、HFへの反対が巻き起こった。反対はメディアに投稿されたり、役所に訴えられたが、とくに禁酒、薬物を断つことをしないままアパートへと入居することが「無責任」とみなされ、HFに批判が集中したという。とくにその批判はシェルターを運営していたクリスチャンが先導したとされている (Padgett, Henwood, Tsemberis 2016: 108)。2001年にはツェンベリス、ローカルの推進側、反対側の3者が同席し、大規模な集会が行われたが、様々な批判があがったようである。

この点については、ウエストチェスター郡でHFのような新たな取り組みが導入される際、既存の団体との緊張関係がいかんにして生じるのか、構築主義的な方法論で検討したバーバラ・フェルトンに詳しい (Felton 2003)。フェルトンはこの出来事の関係者25名にインタビューを行い、各アクターの経験の核として、提案の形式、外部団体の使用、新たな実践の特異性への疑問の3つを抽出している⁹⁾。

まず、新たな支援を違ったやり方で導入していたら反対を防いでいたかについては、とくに社会支援課がトップダウンでHFを導入するように動いたため、既存の支援団体（とくにシェルター運営団体）が、違うやり方であれば反対はなかっただろうと発言した (Felton 2003: 314)。シェルター運営者にとってはHFのトップダウンの導入は、自分たちの日々の尽力に疑義がかけられ、予算が縮小され、自分たちの仕事を失うように聞こえたのだ¹⁰⁾。

次に自分たちの郡の外から団体 (HF) を取り込む必要があったのかという点について、ローカルの支援団体は自分たち以上に外部団体がうまくHFを提供するという点に懐疑的であり、「当事者にはすでに完全なシステムがある」「我々はすでに知識が豊富である」といったクレームがローカルから出されることとなった。HF推進側からすると、従来の支援策は支援哲学が根本的に違うため、ローカルの団体がHFを行うには数年かかることや (HF団体もHFを開始して最初の3年ほどは学びの期間であったとしている)、HFの理念が水に流れていまいことが懸念されていた (Felton

2003: 316)。

HFは既存のプログラムに対して本当に唯一無二なのかについては、推進側からはパラダイムシフトとみなされていたが、ローカルの一部からは「ハームリダクションや当事者主体はHFが最初ではない」「家に入居するまでに禁酒・薬物を断つことを要求するとうまくいかないことは知っている」などの批判が起こった (Felton 2013: 317)。

4.2 各国からの批判

世界各国がアメリカ型のHFを採用するなかで、HFへの批判や導入にあたっての困難も提示されはじめる¹¹⁾。

カナダは2009年にAt Home/Chez Soiという名のHFプロジェクトが5都市で行われたが、その導入のプロセスについて検討しているのはキャメロン・ケラーたち(ツェンベリス含む総勢10人)の「カナダ5都市におけるHFの最初の遂行：ひとつのサイズで合わないとき、どうやって靴を合わせるか?」という論文である(Keller et al. 2013)。論文のタイトルどおり、アメリカのHFをカナダのローカルな文脈に落とし込む際に、5都市(バンクーバー、ウィニペグ、トロント、モントリオール、モンクトン)がどのように適応していったのかが紹介されている。(一箇所の建物に入居する)集団型のHFに変換したり、先住民の文化的背景を踏まえた適応や、多様な人種的マイノリティが抱える言語の困難やレイシズムへの対応等があげられている。カナダにおけるHFの遂行にあたって、遂行の明確なガイダンスの欠如と現行の支援の欠如(Saul, Duffy, Noonan et al. 2008)が困難として指摘されている。同時にHFを遂行していくうえで、とくに多様な団体の協働的な支援を得るにあたってローカルなコーディネーターが鍵を握るとされている(Keller et al. 2013: 287)¹²⁾。

オーストラリアからは、ガイ・ジョンソン、シャロン・パーキンソン、キャメロン・パーセルが、HFの批判的継承のために以下の3点を指摘している(Johnson, Parkinson, Parsell 2012)。(1)まずHFによるコストの減少の主張に対しては、減少ではなくむしろ相殺である。(2)HF対象者がアパートで居住する定着率の高さはわかったが、薬物依存や社会的排除に関する効果はあまり明らかにされていない。(3)またHF対象者を選別しているから、定着率もあがっているのではないか(すなわちターゲットは誰か明らかにしておく必要がある)、という指摘があげられている。

またHFはホームレス状態の人びとを生み出す構造を変える解毒剤にはならない。HFは万能薬ではないことに支援者は自覚するべきだ、と指摘している (Johnson, Parkinson, Parsell 2012: 12)。

4.3 HFと社会統合・包摂

キム・ホッパーは、サポートハウジングプログラム (HFの他の言い方) の圧倒的な効果を認める一方で、社会統合に失敗しており、むしろ中断したメカニズム (abeyance mechanism) として機能すると指摘する (Hopper 2012)。ホッパーはこの点についてナイーブな社会学的観点かもしれないと断りをいれつつも、HFで家に入ったとしても、地域で孤立しているとすれば、それは隔離された施設に入っていることと同じようにプログラムが機能してしまい、(彼らの権利は奪われることはないが) 社会的な混在の機会から引き離す「先延ばし戦略 (holding action)」だということである。HFの推進派自身もこのことに自覚的であるため、ホッパーはこれらの点をどのように解釈するかが問題であるとしている。

なお、こうしたHF利用者の社会統合に関する実態について、デボラ・クウイルガーズとニコラス・プリースによる調査レビューがある (Quilgars, Pleace 2016)。クウイルガーズとプリースは、社会統合を「元ホームレス状態の人がコミュニティの中で望みのとおり住み、働き、学び、参加できる、そしてより広いコミュニティの他の成員のように多くの機会がある度合い」(Quilgars, Pleace 2016: 7) としたうえで、HFと社会統合をめぐる知見を (1) コミュニティや社会とのつながり、(2) 生活の質、(3) 存在論的安心、(4) パッシング (コミュニティからの受容)、(5) 就労 (経済的参加)、(6) 投票 (政治的参加) の6項目に分類し、まとめている。

以下では、クウイルガーズとプリースが項目ごとに紹介している調査を列挙するにとどめるが、これらの調査内容とともに、「HFと社会統合」に関するテーマは社会学的観点から改めて別稿を用意したい¹³⁾。

まずコミュニティ参加における (1) コミュニティや社会とのつながりのテーマについては、リスボンなどヨーロッパの4つのプロジェクトにおける利用者のコミュニティ活動 (スポーツやレクリエーション施設、図書館、地元の喫茶店・レストラン、コミュニティイベント、薬物やアルコールの自助組織など) への参加の度合いを明らかにした (Busch-Geertsema 2013)、アメリカの11箇所アパート入居後1年間を調査し、コミュニ

ティ参加については小さな統計的有意が現れたが、医療的な症状についてはさほど変化しなかったことを明らかにした (Tsai, Mares and Rosenheck 2012)、2 節で紹介した (Gulcur, Tsemberis, Stefancic, Greenwood 2007)、従来の政策と差はみられないものの、社会統合にわずかながら改善がみられたオーストラリアにおける 4 年間のランダム化比較試験 (Johnson, Kuehnle, Parkinson, Sesa and Tseng 2014)、近隣と家族に関して良い結果がでたイングランドの調査 (Bretherton, Pleace 2015) があげられている。

(2) 生活の質に関しては、ランダム化比較試験において家や近所に関して大きな差がでたカナダの Chez Soi プロジェクトの調査 (Goering et al. 2014)、ランダム化比較試験において、HF と従来の政策ともに QOL インデックスに有意差がみられた (ただし HF が高い) フランスの調査 (Tinland, Psarra 2015) があげられている。

(3) 存在論的安心に関しては、たとえ長期の野宿生活者でもひとたびアパートへ入ると安定することを指摘したイングランドの調査 (Bretherton, Pleace 2015)、HF を利用した人はプライバシーや自立、自由の感覚が増加したことを報告したアメリカの調査 (Yanos, Barrow and Tsemberis 2004)、カナダの調査 (Goering et al. 2014)、くわえて家が、安心や安全や自己の尊厳、社会の一員などの感覚を与えるといったように単に住む場所という以上の存在となっていることに言及したカナダの調査 (Coltman et al. 2015) があげられている。

(4) のパッシング (コミュニティからの受容) に関しては、近隣とのトラブルはまれで、プロジェクトを通じて解決していることが報告されているヨーロッパの調査 (Busch-Geertsema 2013)、スタッフが仲介し追い出しを防いでいることが報告されているグラスゴウの調査 (Johnsen, Fitzpatrick 2013)、HF 利用者と反社会的行動に関する報告 (Bretherton, Pleace 2015) などがあげられている。

(5) 就労 (経済的参加) に関しては上記に引用した調査などでもふれられているが、就職率は低いものの、就職活動や職業訓練、ボランティアなどの割合は増加の傾向があるとされている。

(6) の投票 (政治的参加) に関しては、投票する意志のある人の割合が増えた調査報告があるものの、まだ議論できるほどのエビデンスがないとされている。

クウイルガーズとプリースによると、2013 年までは HF による社会統合

は「限界がある」あるいは「決定的ではない」とみなされてきたが、上記のようにHFによる社会統合に関する論考は増えてきているとされている。しかし、各論考によって社会統合の基準が異なり、また各国の文脈に応じて比較することが困難であること、近隣ではなく散ったネットワークの存在の検討については未開拓であること、社会統合の要因が何かはまだ明らかでないことなどが指摘され、この領域の研究は発展の途中であるとされている。

4.4 HFとネオリベとの共振

クレイグ・ウィルス (Willse 2010) は、「慢性的ホームレス」の概念の系譜学の視点から、この問題をめぐっては(政府等が)構造的問題に目を向けず、資源の効率的な使用の問題へとシフトしていることに警鐘をならしている。こうした問題は、HFとネオリベリズムとの共振の問題として言い換えることができるだろう。

なかでもPHFの創始者であるツェンベリスが執筆したプログラムのマニュアル (Tsemberis 2010) の言説分析を行った、セリア・ローストランドとキリシ・ジュヒラ (Löfstrand, Juhila 2012) は正面から権力作用の問題を扱っている。

ローストランドとジュヒラは「当事者の選択」を強調するPHFの言説を7点にまとめるなかで、それらがアドヴァンスドリベリズムの統治技法(責任ある選択をおこなう者として主体が統治される)と結びつくことを指摘する。

まずツェンベリスの「選択」をめぐる言説は、以下の7点に集約されている。(1) 利用者の選択を重視することは伝統的な専門家ケアのオルタナティブである。(2) 利用者は独自の選択をすることができる。(3) 選択は利用者の自己決定と個人的統御力を強くする。(4) 多くの選択は利用者のモチベーション、参加を増やし回復を導く。(5) 選択は完全な選択ではない。限界の存在。(6) 努力は選択に関連するリスクを減らすためになされる。しかし繰り返される失敗が利用者の選択を減らす。(7) 「終わらない」失敗は、PHFプログラムにおいて利用者の終わりを意味する。

この(1)から(7)の言説の分析の中で、ローストランドとジュヒラは「当事者の選択」が繰り返すスタッフから間違っただけのものとしてみなされると、回復のプロセスは「失敗」とみなされるため、「リスク」はPHFから

排除され、「当事者の選択」は不可能なポジションへと実質的に追い込まれていくと結論づける。ローストランドとジュヒラは、「当事者の選択」という考え自体を批判することを目的とはしていないが、従来の継続的ケアもHFも、自立・モチベーション・回復を狙っているため、ネオリベが要求する主体像とHFのプログラムは親和的であると述べている。

一方、ローストランドとジュヒラの議論に対してパジェットが応答している (Padgett 2013)。パジェットは主体の統治に関する大きな反論として、まずHF利用者がアパートから追い出されたり、施設入所になった際に、PHFが最初のアパートとは別のアパートを提供したり、あるいは同じアパートを提供するといったなかで、違反とされるような「当事者の選択」はきわめて稀であることをあげている。

また、文脈をおさえない批判は限界があり、パースペクティブのミスリーディングを起こすと反論している。PHFはそもそも従来の階段型の継続的ケアを批判するかたちで登場しており、プログラムからの離脱率であれば、階段型の継続的ケアがHFよりも多いことを付言している。

アドヴァンスドリベラリズムとPHFの関係に関して、フラン・クロドスキーがPHFは強力なネオリベ企業であることを批判し (Klodawsky 2009)¹⁴⁾、先述のホッパーが社会統合というより高い目標に関するHFの限界を指摘している (Hopper 2012) ことをパジェットはふまえつつも、ローストランドとジュヒラが「当事者の選択」の領域を非常に限定的に論じている点について反論している。すなわち、ローストランドとジュヒラは「当事者の選択」の重要性を認めているにもかかわらず、違反するとプログラムから排除されるような「選択」の臨界だけに限定し議論を進めているが、そもそも法による禁止事項 (違法ドラッグ、建物の破壊、暴力行為など) は、HF利用者だけでなく、すべてのアパートの借主に生じることであり、そしてそのような法的な禁止事項を破った際もPHFは当事者を追い出してケアを断ち切るのではなく、他のアパートを紹介すると、パジェットは反論している (Padgett 2013: 344)。

そして、PHFではない違う哲学のプログラムの効果や、支援利用者によって表現された「選択」をめぐる調査が不足していたうえでもなお、当事者の多くは従来の支援ではなくPHFを選ぶとしている (Padgett 2013: 344)。

5. おわりに

HFを推進するにあたって、量的調査はアパートの維持率の高さを打ち出し、その根底には「当事者の選択」が大きなポイントになることを明らかにしてきた。質的調査もまた、アパート生活における「自由」を当事者の声から明らかにした。一方で、アパートに入ったあとの生活に関する調査は、社会統合を新たな課題とみなしている。HFに関する調査はそのプログラムの効果と同時に、プログラムが内包する射程も逆照射してきたといえる。

HFに向けられる学術レベルでの批判は、少なからずHF以前からある既存の支援団体や、当事者の人びとの声の反映として読むことも可能である。だからこそ、アメリカ型HFを各国の文脈（これまでの野宿者運動と支援団体、既存の政策、住宅市場、そして当事者）にどのように導入していくのか。HFの「限界」（「依存症」は劇的に好転しない。社会での「孤立」あるいは、日常が支援者と当事者の関係だけになってしまうなど）をどのように解釈していくのか。HFにもとづく当事者運動は可能か。これらは学術的・実践的に重なりあい重大な課題となつて私たちの前に現れる。そしてこれらの課題は、HFの団体だけを見ても、ましてや当事者だけを見ても解くことのできない課題であろう。ここに社会学が介入する存在意義があるはずだ。

日本国内においてもHFは民間レベルでささやかに開始されている。日本で社会学的な調査を行う際には、既存の自立支援センターのコストベネフィットを算出した（NPO法人ホームレス支援全国ネットワーク 2014）、自立支援センターの効果を明らかにした（北川 2005, 2006；後藤 2017）、厚生施設の検討を行った（北川 2013）、生活保護受給者のパネル調査を行い、受給後もなお社会的排除の状況にあることを指摘した（山田 2013）などの既存調査をふまえながら、本稿で紹介した論考が提示する論点を視野にいれつつ課題設定していく必要があるだろう¹⁵⁾。

謝 辞

本稿の作成にあたり、日本大学より第一種海外派遣研究員の助成を受けました。また在外研究中にアドバイスをいただいた、Deborah K. Padgett先生（ニューヨーク大学）、東京プロジェクトのスタッフの皆様にも御礼申し上げます。

注

- 1) 指標に関しては、「当事者の選択」に関してはD.スレブニク、J.リビングストン、L.ゴードン、D.キングによって開発されたスケール。居住状況に関してはNew Hampshire Dartmouth Psychiatric Research Centerによって開発された6month residential follow-back calendar。アルコールやドラッグの使用に関してはDrug and Alcohol Follow-Back Calendar。薬物依存の治療の利用に関してはTreatment Services Inventoryの簡易版。精神的症状に関してはColorad Symptom Indexを採用したとされている。
- 2) 精神病理学の測定方法で、幻聴や不安の症状がどれくらい起こるかを調べる項目である。
- 3) 語りから抽出されたテーマとして、「裏切り」（ケースワーカーや病院のセキュリティによるレイプに関する語り）、「トラウマの恐ろしい性質」（暴力で死にかけるといった語り）、「路上生活や話すことに関する不安」（路上で襲われる恐れや、トラブルに巻き込まれる恐れから施設で迂闊に話ができないといった語り）、「自分の居場所への欲求」（ペットを飼いたい。ドロップインセンターに入るには精神障害者としてロールプレイしなくてはならないといった語り）、「アウトキャストVSアウトロー（地位喪失とジェンダー）」（バーは女性が歓迎される数少ない場のひとつ、地位の喪失は自己非難に結びつくといった内容の語り）があげられている（Padgett, Hawkins, Abrams, Davis 2006）。
- 4) 回復を個別的で記憶に残る決定として描く人もいれば、段階的な出来事として思い返す人もいた。スピリチュアルな体験がきっかけになった人や、子どもから「やめてほしい」と要求されたことがきっかけになった人や、長期の入院や、刑務所での服役によって自動的に薬を断つことができた人もいる（ただし強制的な入院、逮捕は薬物を断つことには役立ってもメンタルヘルスの回復にはいたらない）。また当事者の属性によって、回復の達成に何が助けになったのか、回復の維持に何が助けになったのかは異なる。回復の維持にとって、サポートハウスのプログラムでは薬物を断つことが求められていることや、HFプログラムでは家が直接のきっかけではないにしろ、大きな強みであるとみなされている。また長い入院をきっかけに薬物を断った当事者はセルフヘルプグループで回復を維持したり、HFプログラムの当事者はセルフヘルプグループを拒否したりしている。また多くの当事者が回復の維持には重要な他者が必要であることを述べている（Henwood, Padgett, Smith, Tiderington 2012）。

- 5) 従来のプログラムスタッフはどの程度、継続的ケアのアプローチがアパートでの自立生活の準備になると信じているか、いかにして自身の役割をアパートへの「門番」として理解しているのか、一方でHFスタッフはどのくらい当事者中心のアプローチを承認しているのか経験的な調査はない、という問題関心のもと21人の従来のプログラムスタッフと20人のHFスタッフに聞き取りを行っている。支援者はアパートの役割をどのように見ているのか。アパートにアクセスする過程は支援者と当事者の関係性にどのように影響するか。支援者はアパートに関するプログラムの価値観と哲学をどのように明確にし、翻訳するののかという問いのもと、語りの分析にあたっては「家」、「プログラム哲学」、「強制」あるいは「当事者の選択」にコード化している。
- 6) HFやトリートメント・ファースト (TF) プログラムで働くそれぞれの支援者たちは、異なる視点や価値、パースペクティブを彼らの支援局面で支持するのか。もしあるなら、それらの差異の本質は何か。プログラムの構造や文脈は支援者たちの視点に影響するか、といった問いが含まれている。調査結果として、HFのスタッフがTFのスタッフよりも「当事者の選択」を重視していて、個室を持ち、治療を断ること、そして家を得たあとに他の問題にうまく対処できることに同意していることが明らかになった。またHFスタッフはTFスタッフよりも、当事者のいわゆる逸脱行動（とくにプログラムへの参加等）に対して寛容であるスコアとなった。
- 7) 他にも支援者に関する調査として、ピクトリア・スタンホープは、HFのサービス従事という社会的なプロセスが、プログラムの効果にどのように貢献するのか、エスノグラフィックな方法で探求している (Stanhope 2012)。またシーマ・クリファゼフィらは、シングルサイトのHFのプログラム改良について、スタッフと、その利用者や管理者へ聞き取りを行っている (Clifasefi et al 2016)。
- 8) HFと野宿者運動の関係について、筆者の立場は (山北 2016) で少しふれている。
- 9) なおフェルトンは調査地について明示していないが、ツェンベリスがウエストチェスター郡の当時の状況について紹介する際、フェルトンのこの論考を引用している。
- 10) 現在でも既存のシェルター運営団体等からの危惧があげられている。例えば、HUD (住宅都市開発省) がHFに関心をもったことで、シェルター予算が大幅に策源されたことに伴い、フロリダ州マイアミのホームレス支援大型施

設カミルスハウスは346,000ドルの予算を失うとされており、他のマイアミの団体も「700人が路上に戻る」と危惧していることが報道されている（「Miami-Dade's homeless need HUD to reconsider its funding choice」 http://www.miamiherald.com/opinion/editorials/article_75453842.html 2016年5月3日記事。2017年11月20日取得。「A 'Housing First' Solution Could Actually Stimulate Homelessness」 https://www.huffingtonpost.com/ralph-da-costa-nunez/is-hud-stimulating-homele_b_10106572.html 2016年5月25日記事。2017年11月20日取得）。

- 11) 本来であれば各国のHF政策と効果を検討したうえでアメリカ型HFに向けられる批判を吟味すべきだが、ひとまず本稿では批判のみをいくつか紹介し、各国のHF政策に関しては別稿を用意したい。
- 12) 山本薫子はカナダの事例を検討し、HFを排除された空間への定住化として位置付けている（山本 2014）。
- 13) 特に先のホッパーの指摘や以下の「ネオリベとの共振」といった文脈をふまえつつも、HF当事者への居宅生活の実態調査から慎重にプログラムを位置付ける必要があると考えている。
- 14) 慢性的なホームレス状態の人びとを支援するにあたって何がベストか、HFと従来のケアのメリットの無邪気な差についてカナダは議論していないということ論考の中心にそえている。むしろこうした議論が政府の意向としてのネオリベに関する理論的・実質的な問題を浮上させるとされており、HFへの大規模なシフトはより周辺化された人びと（ここでは先住民の女性の野宿者）を排除する手段になりうるとされている（筆者による下線）。公共空間で暮らす権利だけでなく、都市におけるあらゆる空間（一時施設、通過施設、ケアつき施設といった従来のケアなどの一箇所に特化して集められた空間も含む）からそれらの可視的な存在自体が排除されると警告している（Klodawsky 2009: 593）。ネオリベの論理のもとで再開発の文脈とHFの影響が結びついたならば、真っ先に消されるのは（いまでさえ「NIMBY」の論理で建設が反対されるのだから）景観に似合わない施設である（Klodawsky 2009: 601）。（だからこそカナダの場合は）安価な住宅建設への関心が薄いと、HFへの魅力が当事者からすると薄れてしまうかもしれないとされている（Klodawsky 2009: 601）。
- 15) なお本文の途中でも少し言及したように、このノートを継続するとすれば、「社会統合に関する調査」や、「各国の政策とHF」などのレビューが③稿

として考えられる。これらはまた別の機会としたい。

参考文献

- Busch-Geertsema Volker, 2013, *Housing First Europe: Final Report*.
- Bretherton Joanne, Pleace Nicholas, 2015, *Housing First in England: An Evaluation of Nine Services*.
- Clifasefi Seema, Collins, Susan E., Torres Nicole L., Grazioli Véronique S., Mackelprang, Jessica L., 2016, “Housing First, But What Comes Second? A Qualitative Study of Resident, Staff and Management Perspectives on Single-Site Housing First Program Enhancement,” *Journal of Community Psychology*, 44(7): 845-55.
- Coltman Linda, Gapka Susan, Harriot Dawnmarie, Koo Michael, Reid Jenna, Zsager Alex, 2015, “Understanding Community Integration in a Housing-First Approach: Toronto At Home/Chez Soi Community-Based Research,” *Intersectionalities*, 4(2): 39-50.
- Dupuis Ann, Thorns, David C., 1998, “Home, home ownership and the search for ontological security,” *The Sociological Review*, 46(1): 24-47.
- Felton, Barbara J., 2003, “Innovation and Implementation in Mental Health Services for Homeless Adults: A case Study,” *Community Mental Health Journal*, 39(4): 309-22.
- Goering Paula et al., 2014, *National Final Report: Cross-site At Home/Chez Soi Project*.
- 後藤広史, 2017, 「ホームレス自立支援センター再利用者の実態と支援課題」日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』93: 1-15.
- Gulcur Leyla, Stefancic Ana, Shinn Marybeth, Tsemberis Sam, Fischer, Sean N., 2003, “Housing, Hospitalization, and Cost Outcomes for Homeless Individuals with Psychiatric Disabilities Participating in Continuum of Care and Housing First Programmes,” *Journal of Community & Applied Social Psychology*, 13: 171-86.
- Gulcur Leyla, Tsemberis Sam, Stefancic Ana, Greenwood, Ronni M., 2007, “Community Integration of Adults with Psychiatric Disabilities and Histories of Homelessness,” *Community Mental Health Journal*, 43(3): 211-28.
- Henwood, Benjamin F, Stanhope Victoria, Padgett, Deborah K., 2011, “The Role of Housing: A Comparison of Front-Line Provider Views in Housing First and

- Traditional Programs, ” *Administration and Policy in Mental Health and Mental Health Research*, 38(2): 77-85.
- Henwood, Benjamin F., Padgett, Deborah K., Smith, Bikki Tran., Tiderington Emmy, 2012, “Substance Abuse Recovery after Experiencing Homelessness and Mental Illness:Case Studies of Change Over Time, ” *Journal of Dual Diagnosis*, 8 (3): 238-46.
- Henwood, Benjamin F., Shinn Marybeth, Tsemberis Sam, Padgett, Deborah K., 2013, “Examining Provider Perspectives within Housing First and Traditional Programs, ” *American Journal of Psychiatric Rehabilitation*, 16(4): 262-74.
- Hopper, Kim, 2012, “The Counter-Reformation That Failed? A commentary on the Mixed Legacy of Supported Housing, ” *Psychiatric Services*, 63(5): 461-63.
- Johnsen Sarah, Fitzpatrick Suzanne, 2013, *Housing First Europe:Local Evaluation Report Glasgow*.
- Johnson Guy, Parkinson Sharon, Parsell Cameron, 2012, *Policy shift or program drift? Implementing Housing First in Australia*, Australian Housing and Urban Research Institute.
- Johnson Guy, Kuehnle Daniel, Parkinson Sharon, Sesa Sandra and Tseng Yi-Ping, 2014, *Sustaining exits from long-term homelessness: A randomised controlled trial examining the 48 month social and economic outcomes from the journey to social inclusion pilot program*.
- Keller Cameron, Goering Paula, Hume Catharine, Macnaughton Eric, O’Campo Patricia, Sarang Aseefa, Thomson Marcia, Vallée Catherine, Watson Aimee, Tsemberis Sam, 2013, “Initial Implementation of Housing First in Five Canadian Cities: How Do You Make the Shoe Fit, When One Size Does Not Fit All?,” *American Journal of Psychiatric Rehabilitation*, 16: 275-89.
- 北川由紀彦, 2005, 「単身男性の貧困と排除——野宿者と福祉行政の関係に注目して」岩田正美・西澤晃彦編著『貧困と社会的排除——福祉社会を蝕むもの』ミネルヴァ書房, 223-42.
- , 2006, 「野宿者の再選別過程——東京都『自立支援センター』利用経験者聞き取り調査から」狩谷あゆみ編『不埒な希望——ホームレス/寄せ場をめぐる社会学』, 119-60.
- , 2013, 「〈ホームレス対策〉の展開過程——東京(区部)における『厚生関係施設』と『路上生活者対策』に注目して」『放送大学研究年報』30:

41-53.

- Klodawsky Fran, 2009, “ Home Spaces and Rights to the City: Thinking Social Justice for Chronically Homeless Women,” *Urban Geography*, 30(6): 591-610.
- Löfstrand, Cecilia Hansen., Juhila Kirsi, 2012, “The Discourse of Consumer Choice in the Pathways Housing First Model,” *European Journal of Homelessness*, 6(2): 47-68.
- NPO 法人ホームレス支援全国ネットワーク, 2014, 「ホームレス自立支援センターの費用対効果の推計」
http://www.homeless-net.org/docs/20141225_hiyoutaikouka.pdf (2017年11月20日取得)。
- Padgett, Deborah K., Hawkins, Robert Leibson., Abrams Courtney, Davis Andrew, 2006, “In Their Own Words:Trauma and Substance Abuse in the Lives of Formerly Homeless Women With Serious Mental Illness,” *American Journal of Orthopsychiatry*, 76(4): 461-7.
- Padgett, Deborah K., 2007, “There’s No Place like (a) Home: Ontological Security Among Persons with Serious Mental Illness in the United States,” *Social Science & Medicine*, 64(9): 1925-36 (=National Institutes of Health Public Access, page 1-16).
- ., 2013, “Choices, Consequences and Context: Housing First and its Critics,” *European Journal of Homelessness*, 7(2): 341-7.
- Padgett, Deborah K., Henwood, Benjamin F., Tsemberis, Sam J., 2016, *Housing First: Ending Homelessness, Transforming Systems, and Changing Lives*, New York: Oxford.
- Quilgars Deborah, Pleace Nicholas, 2016, “Housing First and Social Integration:A Realistic Aim?,” *Social Inclusion*, 4(4): 5-15 (COGITATIO page 1-11).
- Saul Janet, Duffy Jennifer, Noonan Rita, Lubell Keri, Wandersman Abraham, Flaspohler Paul, Stillman Lindsey, Blachman Morris, Dunville Richard, 2008, “Bridging Science and Practice in Violence Prevention: Addressing Ten Key Challenges,” *American Journal of Community Psychology*, 41: 197-205.
- Stanhope Victoria, 2012, “The ties that bind: Using ethnographic methods to understand service engagement,” *Qualitative Social Work*, 11(4): 412-30.
- Tinland Aurélie, Psarra Christina, 2015, *Housing First:Lesson from France*, Presentation at the Institution of Global Homelessness Seminar, Chicago.

- Tsai Jack, Mares, Alvin S., Rosenheck, Robert A., 2012, “Does Housing Chronically Homeless Adults Lead to Social Integration?,” *Psychiatric Services*, 63(5): 427-34.
- Tsemberis, Sam J., Moran Linda, Shinn Marybeth, Asmussen, Sara M., Shern, David L., 2003, “Consumer Preference Programs for Individuals Who Are Homeless and Have Psychiatric Disabilities: A Drop-In Center and a Supported Housing Program,” *American Journal of Community Psychology*, 32: 305-17.
- Tsemberis Sam, Gulcur Leyla, Nakae Maria, 2004, “Housing First, Consumer Choice, and Harm Reduction for Homeless Individuals With a Dual Diagnosis,” *American Journal of Public Health*, 94(4): 651-6.
- Tsemberis Sam, 2010, *Housing First: The Pathways Model to End Homelessness for People with Mental Illness and Addiction*, Minnesota: Hazelden.
- Volk, Jennifer S., Aubry Tim, Goering Paula, Adair, Carol E., Distasio Jino, Jette Jonathan, Nolin Danielle, Stergiopoulos Vicky, Streiner, David L, Tsemberis Sam, 2016, “Tenants with additional needs: When housing first does not solve homelessness,” *Journal of Mental Health*, 25(2): 169-75.
- Willse Craig, 2010, “ Neo-liberal biopolitics and the invention of chronic homelessness,” *Economy and Society*, 39(2): 155-84.
- Yanos, Philip T., Barrow, Susan M., Tsemberis Sam, 2004, “Community Integration in the Early Phase of Housing Among Homeless Persons Diagnosed with Severe Mental Illness: Successes and Challenges,” *Community Mental Health Journal*, 40(2): 133-50.
- 山田壮志郎, 2013, 「ホームレス状態の解消と持続する排除——社会的包摂志向のホームレス対策に向けて」『日本福祉大学社会福祉論集』128: 51-65.
- 山北輝裕, 2016, 「いのちとおうち——野宿者支援・運動の現場への手紙」『新社会学研究』1: 45-60.
- , 2017, 「ハウジング・ファーストに関するノート①」『社会学論叢』189: 39-69.
- 山本薫子, 2014, 「福祉化する都市下層地域における社会的包摂／排除——カナダ・バンクーバーにおけるハウジングファーストによるホームレス支援施策を中心に」『年報社会学論集』27: 208-19.